

## 意味変化の一方方向性仮説についての一考察

中 野 弘 三

### 1. はじめに

Traugott は最近の論文で次の(1)~(3)に見るように「語の意味は客観的状況より主観的状況を、また外的な状況 (described situation) より談話的な状況 (discourse situation) を表すようになる」傾向があること、また「語は外的状況を表す意味から内的 (心理的) 状況を表す意味を発達させ (傾向Ⅰ)、さらに談話構成的 (textual) 状況を表す意味を発達させ (傾向Ⅱ)、最後には命題に対する話者の主観的信念ないしは態度を表す意味を発達させる (傾向Ⅲ)、換言すると、命題的 (propositional) な意味から、談話構成的 (textual) な意味、さらには態度表明的 (expressive) な意味を発達させる」という意味変化の傾向があることを指摘している。(cf. Traugott 1982, 1986, 1989 and Traugott and König 1991)

(1) Over time, meanings tend to come to refer less to objective situations and more to subjective ones (including speaker point of view), less to the described situation and more to the discourse situation. [Traugott 1986, p. 540]

(2) Tendency I: Meanings based in the external described situation > meanings based in the internal (evaluative/perceptual/cognitive) situation.

Tendency II: Meanings based in the described external or internal situation > meanings based in the textual situation.

Tendency III: Meanings tend to become increasingly situated in the speaker's subjective belief-state/attitude toward the proposition.

[Traugott and König 1991, pp. 208-209]

(3) propositional > (textual) > (expressive)

傾向Ⅰの例としては、OE *æfter* が空間的意味から時間的意味を発達させたこと、*grasp* が「つかむ、捉える」の意から「把握する、理解する」の意を発達させたことがその例であり、傾向Ⅱの例としては、OE *æfter* が時の前置詞の用法から時の接続詞の用法を発達させたことがその例であり、傾向Ⅲの例としては、時の接続詞の OE *siþþan* が *since* という理由の接続詞の用法を発達させたこと、中英語の時の接続詞 *while* が現代英語の 'although' という意の譲歩の接続詞の用法を発達させたことである。

<傾向Ⅰの例> OE *æfter* (spacial preposition) → *æfter* (temporal preposition)

grasp (=take hold of) → grasp (=understand)

<傾向Ⅱの例> OE *æfter* (temporal preposition) → ME *after* (connective)  
 then (=at that time in the past or future) → then (=after that)  
 [cf. I have been ill since *then*./I had a drink, and *then* I went home.]

<傾向Ⅲの例> OE *sippan* (temporal connective) → *since* (causal connective)  
 ME *while* (temporal connective) → *while* (concessive connective)

ここで英語の単語 *after* の意味発達を *after* がつなぐ実体 (entity) という観点から考えてみよう。(4 a) に見るように, OE の *æfter* が空間の前置詞である場合にはそれがつなぐ (関係づける) 実体は「物体」であるが, (4 b) に見るように, *day, tomorrow* のような時間表現をつなぐ用法を発達させると, その *æfter* は時間の前置詞となる。さらに, その時間の前置詞が (4 c) に見るように, 叙述 (predication) [事態 (state of affairs) を叙述する節の意味を表す用語として用いる] と別の叙述をつなぐ用法を発達させると *after* は時間の接続詞として機能することになり, 傾向Ⅱの事例となる。

(4) a. 「物体 *after* 物体」(e. g. Shut the door *after* you.) [spacial preposition]

↓

b. 「時間表現 *after* 時間表現」(e. g. the day *after* tomorrow) [temporal preposition]

↓

c. 「事実 (叙述 *after* 叙述)」(e. g. John came *after* Mary (did).) [temporal connective]

(注) 事実 (叙述・・・) = 「叙述・・・」が事実である。

Since, while についても同様の観点から見ると, *since, while* が関係づける二つの実体 (entity) が (5 a, c) におけるように共に叙述である場合には *since, while* は時間の接続詞であるが, これらの接続詞が「叙述が事実である (事実 (叙述))」という話し手の判断 (認識) を, 主節が表す発話行為や「叙述が事実である」という話し手の判断 (認識) に接続した場合には, (5 b, d) に見るように, 理由を表す接続詞, 譲歩の接続詞に発達し, Traugott のいう傾向Ⅲの事例となる。すなわち, (5 b) の例文でいうと, *since* は *you look tired* (あなたは疲れている様子である) ことが事実であると判断されるから, それと *you had better take a rest* (休息をとるよう忠告する) という, 発話行為<忠告 (勧告)>をつなぐと言える。また譲歩の *while* は一つの叙述が事実である一方で, 他方の叙述も事実である, と二つの叙述が同時に事実であることを表すものである。

(5) a. 「事実 (叙述 *since* 叙述)」(e. g. I have known him *since* he was a boy.)

↓

[temporal connective]

b. 「発話行為 *since* 事実 (叙述)」(e. g. *Since* you look tired, you had better take a rest.)

[causal connective]

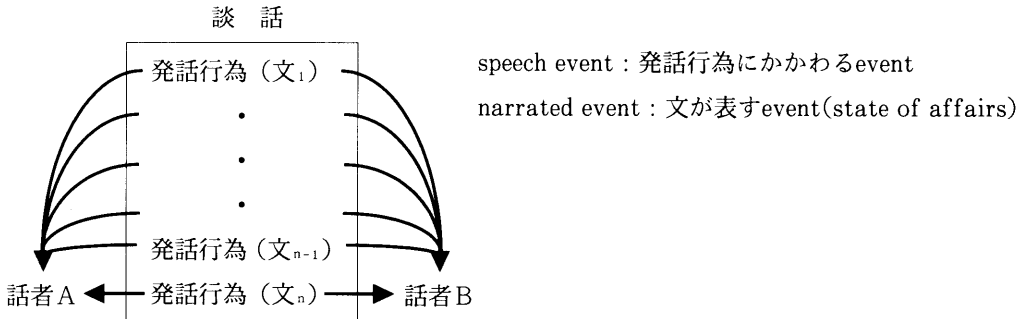
c. 「事実 (叙述 while 叙述)」 (e. g. He took care of my dog while I was on vacation.)

↓ [temporal connective]

d. 「事実 (叙述) while 事実 (叙述)」 (e. g. While I sympathize, I can't really do very much to help.) [concessive connective]

(4), (5) の例で見たように、傾向Ⅱが生じる原因は前置詞のような機能語が叙述を導く (つなぐ) 用法を発達させ、傾向Ⅲの生じる原因は、接続詞が叙述が事実であるという判断や発話行為をつなぐ機能を発達させることと考えられる。では、(4c), (5) の例文における節や文が「叙述」、「事実 (叙述)」 [=叙述が事実であるという判断]、「発話行為」といった異なる実体 (entity) を表すのはなぜであろうか。その理由は、文 (節) というものが (6) のような発話の場において用いられることによると考えられる。

(6) <発話の場における文の意味>



(6) が示すことは次のようである。対話を行う発話の場では話者Aと話者Bは互いに話し手と聞き手の立場を変えながら文を発話して、何らかの発話行為を遂行する。一つの話題について二人の話者の間でそのように交わされる複数の発話行為の総体は談話 (discourse) を成す。発話の場で一人の話者が一つの文を発して遂行する発話行為自体を取り上げると、一つの文の発話はその文が表す何らかの事態 (event, state of affairs) [=narrated event] を聞き手である話者に伝達し、それと同時に遂行される発話行為 [=speech event] は聞き手である話者に発話行為としての意味効果を伝達する。文の一部として用いられる語は、このような発話の場の中で用いられていることを念頭に置いてその意味機能を考察する必要がある、というのが本稿の主張である。

## 2. 文の発話の意味分析

まず、(6) のような発話の場で発せられた一つの文が伝達する伝達内容の考察から始めよう。例えば次の (7a) の文を発話の場で発すると、you are kind という文は i) 「あなたが親切である」という叙述、 ii) その叙述が事実であるということ、 iii) その叙述が事実であるという話し手の信念 (判断, 認識), そして iv) それを聞き手に主張する<陳述>という発話行為の意

味効果、の4種類の意味(効果)を伝達するものと考えられる。(7b)の命令文の発話の場合も、(7a)同様、「あなたが親切である」という叙述、その叙述を実現してほしい(実現すべきだ)という話し手の願望(当為判断)の内容、そしてそれを聞き手に命令する<命令>という発話の力を伝達する。

(7) a. You are kind. [= I say to you that I believe that it is true that you are kind.]

<陳述>

b. Be kind. [= I order, because I want it, that you bring it about that you are kind.]

<命令>

文が表す叙述[すなわち、語られる事態(narrated event)]が事実(true)であるという話し手の判断/信念/知識や、叙述を実現してほしい(すべきだ)という話し手の願望/当為判断を「命題態度」(propositional attitude)と呼ぶと、平叙文の発話によって伝えられる意味の構造(すなわち、発話の意味構造)は(8)に示したように、発話の力(illocutionary force)と命題態度からなる発話行為と、命題態度の対象ないしは内容である命題(すなわち、叙述が事実であること)からなると考えられる。

(8) 平叙文の発話によって伝えられる意味：発話の力 (命題態度) 事実 (叙述)

[発話の意味構造]

[発話行為]

[命題]

(注) 「発話の力」=発話行為の意味効果

「命題態度」=命題に対する話し手の心的態度(psychological attitude);平叙文の場合は「叙述が事実である」という話し手の信念/判断/知識

「命題」=命題態度の対象で、文(節)が表す叙述の事実性

このように、平叙文の発話が伝える4種類の意味は、「叙述、命題 [=事実(叙述)], 命題態度、発話行為」ということになる。例えば、次の(9)の文のこれら4種の意味は「ジョンが日本についての本を書いた」という叙述、その叙述が事実であること(命題)、およびそれに対する信念/判断(命題態度)、そしてそれを聞き手に主張する発話行為の意味効果(発話の力)である。

(9) a. John wrote a book on Japan.

b. I SAY to you <I BELIEVE (it is true that John wrote a book on Japan.)>

発話の力

命題態度

命題 [=事実(叙述)]

### 3. 命題(proposition)と叙述(predication)の区別に対する根拠

語が話し手の命題に対する主観的態度を表す意味を発達させる傾向、すなわち、Traugottの指摘する傾向Ⅲは、例えば、since, whileのような接続詞が叙述のみを接続するのではなく、「叙述が事実である」という話し手の命題態度の反映である命題を接続する用法を発達させることから生まれることを(5)で見えてきたが、ここで叙述と命題を区別するどのような経験的根拠があるかを見ておく必要がある。一般に文や節は文脈から切り離しても何らかの出来事、状態を表し、

それが叙述である。一方、発話の場において発せられた文の内容は、話し手の命題態度の対象(平叙述の場合は、話し手の信念(判断/知識)の内容)、つまり、命題でもある。このように、例えば、John is guilty. という文が発話された場合にそれが伝える内容には、「ジョンが有罪である」という叙述と、その叙述が事実であるという話し手の判断の内容、すなわち、命題が含まれていると分析すると、まず、(10) のような否定文の曖昧性が適切に説明できる。

- (10) John is not guilty. = a) It is true that John is not guilty. [叙述の否定]  
 = b) It is not true that John is guilty. [事実の否定; 否認]

(10 a, b) に示したように、その曖昧性は叙述の否定と、叙述の事実であることの否定、すなわち、否認であると説明できる。

また、知覚動詞の場合、(11 a) のように知覚動詞の補文が小節 (small clause) の形式をとった叙述である場合には知覚動詞は本来の直接知覚の意味を表すが、(11 b, c) のように、that 節の形式をとる命題を補文としてとる場合は知覚に基づく知識の獲得を表す、とその用法を説明できる。

- (11) a. I saw him walk down the street. / I heard her crying. [叙述; 出来事の直接知覚]  
 b. I saw that Mary had been crying. [命題; 出来事についての知識の獲得]  
 c. I hear you will probably sing in the Royal Albert Hall next week. / I saw in the newspaper that Peter had been fighting. [命題; 出来事についての(他人の)知識の獲得]

さらに、接続詞の場合はすでに(5)でも見たように、叙述を導く場合と命題を導く場合があると考えられ、叙述を導く場合は、(12 a), (13 a), (14 a) におけるように、副詞節の表す叙述と主節の表す叙述の時間的關係、物理的因果關係を表すのに対し、命題を導く場合は、(12 b), (13 b), (14 b) に見るように、意味を変えずに it is true that を補うことができ、主節の事実を述べる、ないしは、主節が表す判断を述べるための論理的根拠を表す。

- (12) a. He looked after my dog while I was on vacation. [叙述]  
 b. While (it is true that) he is a good pianist, he is also an out-standing composer. [命題]

- (13) a. I have been relaxing since the children went away on vacation. [叙述]  
 b. Since (it is true that) he still hasn't arrived, he must have missed the train. [命題]

- (14) a. If it rains, the match will be cancelled. [叙述]  
 b. If (it is true that) you own a house in Tokyo, you are very lucky. [命題]

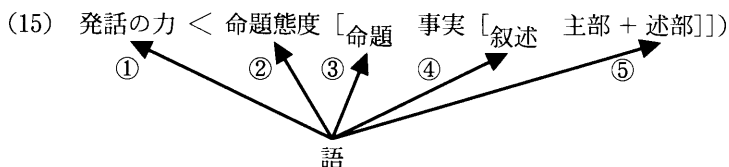
- (注) a. \*If it will rain tomorrow, the match will be cancelled. [叙述]  
 b. \*If I will eat too much, I will get fat. [叙述]  
 c. I will come if (it is true that) it will be of any use to you. [命題]

d. If (it is true that) he'll be left destitute, I'll change my will. [命題]

また、(注)に示したように、if 節中に未来の will を含み得るか否かの問題に関しても叙述を導く if 節は、a, b におけるように、それを含み得ないのに対し、命題を導く if 節は c, d におけるようにそれを含み得る、と説明できる。

#### 4. 発話の意味構造と語の意味の関係

語の意味用法の説明に叙述/命題の区別が有用であることを上で見てきたが、発話の意味構造の他の部分に関わる意味を表す語も存在する。語の意味と発話の意味構造の関係を調べると、例えば(16)~(19)に見るように、(15)の①~⑤に示したように発話の意味構造の各部分に関わる意味を持つ語が存在する。



(16) a. He was at home *then*. ⑤ [叙述の内容]

b. I had a drink, and *then* I went home. ④ [叙述をつなぐ]

c. Speaker A: He might not give us the money.

Speaker B: *Then*, what would we do? ① [発話行為をつなぐ]

(17) a. They could not get rid of the bad habit *anyhow* [=in any manner whatever].

⑤ [叙述の内容]

b. *Anyhow* [=in any case, at all events] you had better see the doctor soon.

① [発話行為をつなぐ]

(18) a. He heard me screaming, *so* he came. ④ [叙述をつなぐ]

b. (You say he's deaf, but) he came, *so* he heard me screaming.

② [命題態度を修飾]

c. Here we are in Paris, *so* what would you like to do on our first evening here?

① [発話行為をつなぐ]

(19) a. I go by car *if* (=whenever) it rains. ⑤ [叙述の内容]

b. *If* it rains tomorrow, the match will be cancelled. ④ [叙述をつなぐ]

c. *If* he's Marconi, I'm Einstein. (彼がマルコーニのような大学者であるというなら、私は定めしアインシュタインだ>私がアインシュタインでないのと同様、彼はマルコーニのような大学者であるはずはない) [rhetorical conditional] ③ [命題をつなぐ]

d. *If* he acts like that, he is a fool [=I conclude that he is a fool].

② [命題態度を修飾]

e. *If you're going out, it's raining. / If you want to know, I haven't seen him.*

① [発話の力を修飾 (主節の発話を行う条件を表す)]

(16) に示した *then* は叙述の内容をあらわす⑤の「その時」の意, 叙述をつなぐ④の「それから」の意, さらに発話行為をつなぐ①の「それでは」の用法を持つ。anyhow, so も (17), (18) に示したような用法を持ち, 接続詞 *if* は, (19) に示したように, ①~⑤の (15) に示したすべての可能な用法を持つものと思われる。

ここで認知文法の提唱者の Langacker の枠組みでは, これまで観察してきた語の意味拡張, 意味変化がどのような扱いを受けることになるかを考えてみたい。次の(20)の引用にあるように, Langacker の認知文法では語の意味は基本的には *thing* と *relation* の二つの類に分類される。

(20) Semantic structures can be classified according to the nature of their profile. The most fundamental distinction is between what I call things and relations. As a rough approximation, we can define a thing as a bounded region in some domain, and equate the class of nouns with the class of expressions designating things. . . . Observe that the definition of a thing makes no reference whatever to physical objects, though some objects — as bounded region in three-dimensional space — satisfy the definition. [Langacker 1985, p. 111]

(20) の定義によると, *thing* はある意味領域 (domain, base) に含まれる境界を持った領域 (bounded region) であり, *thing* を表す表現は名詞である。*thing* は, 図示すると, 次の (21 a) に見るような意味領域に含まれる名詞によってプロファイルされる実体 (entity) である。これに対し, *relation* は, (21 b) に見るように, プロファイルされた二つ (ないしはそれ以上) の実体の間の相互の関係である。

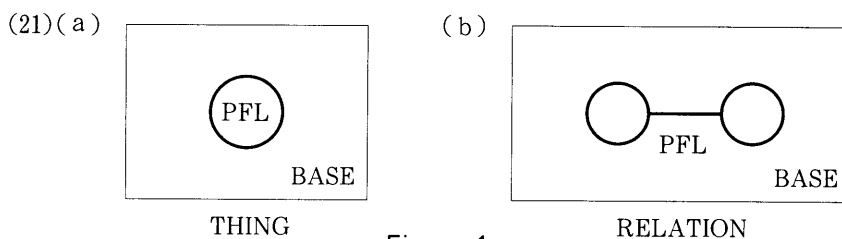
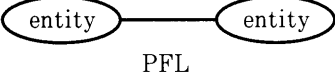


Figure 1

なお, *relation* を表す語は, (22) の引用にあるように, 二つないしはそれ以上の実体間のなんらかの関係をプロファイルするもので, (23) に示したように, その実体は *thing* であっても別の *relation* であってもよいと Langacker は述べている。

(22) Relational predications profile the interconnections between two or more conceived entities (where an entity may be a thing or another relation). Within the class, a basic distinction is made between stative relations (corresponding to adjectives, adverbs, prepositions, and similar categories) and processes (corresponding to

verbs). [Langacker 1985, p. 111]

- (23) RELATION:  entity = thing or relation  
PFL

ところで、(4)でその発達を見た after は relation を表す語であるので、(4)に示した after がつながるものが「物体→時間表現→叙述」と変化する発達の状況は、(23)の relation の構造に基づいて考えると relation である after がつながる実体が、concrete thing (すなわち、物体である具対物) から、abstract thing (抽象物)、さらに relation へと変化したもの、ということができる。では、(5)で見た while, since の発達はどうかであろうか。while, since が主観的な意味を発達させた傾向Ⅲの意味変化は「叙述と叙述をつなぐこれらの語が、命題(=事実(叙述))を他の命題ないしは発話行為につなぐ機能を発達させたこと」と説明したが、この変化は relation を表す while, since がつながる実体がどのように変化したことになるのだろうか。ここで Langacker の分析において発話行為、命題態度、命題がどのような実体とみなされるのか、見てみよう。

- (24) ... major ground elements (the speaker and hearer, as well as the time and place of the speech event) can figure in the scope of predication, in either of two ways: as a profiled, onstage entity; or as an unprofiled point of reference, external to the objective scene. [Langacker 1985, p. 131]

Langacker は、発話行為に関わる speech event, その参与者(話し手, 聞き手)およびその背景(場所と時)を総称して ground と呼ぶ。そして(24)の引用にあるように、主要な ground 要素(すなわち、話し手, 聞き手, 発話の時と場所)は、1) プロファイルされたステージ上の実体(entity)として、ないしは、2) 描写される叙述の外側にあつて、プロファイルされない参照点(point of reference)として言語表現に含まれる、と言う。たとえば、次の(25)の文中での leave は単語としての leave であるので、その単語の意味には ground 要素はなにも関わらず、Figure 2(a)に示してあるように、それが表す relation は ground (話し手S, 聞き手H, 発話の時/場所G)からは切り離されている。

- (25) The word 'leave' consists of five letters. [Figure 2(a)]

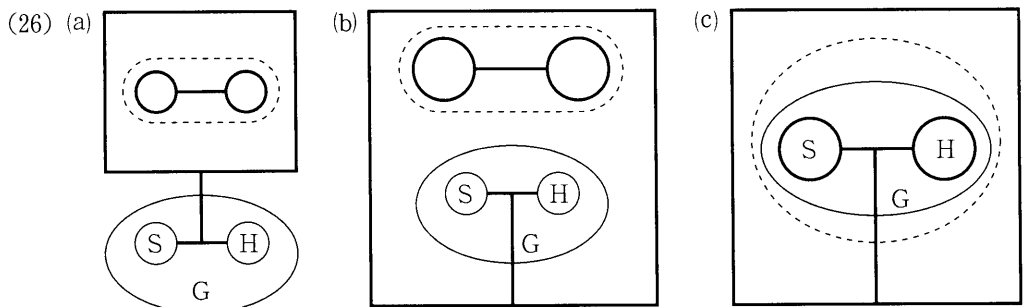


Figure 2



一方、(27 a) は過去時制という ground 要素を含む文であり、この ground 要素は、Figure 2 (b) に示したように、この文が表す叙述のプロファイルされない参照点を成す（つまり、この文の表す叙述の発生した時を発話の時点から見た過去時と決定する）。(27 b) の文の場合も同様に、命令形という ground 要素がこの文の表す叙述を話し手が聞き手に関係づける参照点の役割を果たす。他方、ground 要素がプロファイルされてステージ上の実体として用いられている例が(28)の明示的遂行文であり、Figure 2 (c) に見るように、ground 要素である発話行為動詞が express され、主張されていることに注目されたい。

(27) a. John left home early. [Figure 2 (b)]

b. Leave! [Figure 2 (b)]

(28) a. I say to you that this wasteful government spending must stop! [Figure 2 (c)]

b. I promise you that everything will turn out all right. [Figure 2 (c)]

次の(29)に見る平叙文、疑問文、命令文が遂行する<陳述>、<質問>、<命令>という発話行為は、(30)の引用によると「聞き手が町を去る」(You leave town) という事態が生じる意思伝達の場 (communicative context) を特定化するもので、この点ではオフステージの参照点 (offstage points of reference) に匹敵するものであるということである。総じて、Langacker は、(31)にあるように、ある実体の位置を話し手、聞き手、およびそれらの人物の知識の領域に関連して特定化する(別の言い方をすると、ある実体の指示対象をそういうものに関連して特定化する)ことを epistemic grounding と呼ぶ。動詞の場合は時制や法が、名詞の場合は定/不定の区別が実体の epistemic grounding を行う。すなわち、epistemic grounding が定形動詞(節)と非定形動詞(節)を区別し、名詞句と単純名詞を区別する。

(29) a. You will leave town immediately. [statement]

b. Will you leave town immediately? [question]

c. Leave town immediately! [command]

(30) The speech event — which I interpret broadly, to encompass not only the physical act of producing the utterance, but also the knowledge and objectives of the speaker and hearer — therefore figures prominently in the conceptions symbolized by these expressions. It specifies a communicative context (abstract domain) in which the designated process (i. e. the hearer leaving town) is situated, and in this respect it is comparable to the offstage points of reference that we have posited for other sorts of examples. [Langacker 1985, p. 133]

(31) Epistemic grounding: An entity is epistemically grounded when its location is specified relative to the speaker and hearer and their spheres of knowledge. For verbs, tense and mood ground an entity epistemically; for nouns, definite/indefinite specifications establish epistemic grounding. Epistemic grounding distinguishes

finite verbs and clauses from nonfinite ones, and nominals (noun phrases) form simple nouns. [Langacker 1987, p. 489]

N. B. ground = the speech event, its participants, and its setting.

(24), (30), (31) の引用から推し量る限り, Langacker の分析では, (32) に示すように, 名詞句は epistemically grounded thing, そして定形節が表す叙述 (事態), 命題, 発話行為はいずれも epistemically grounded relation と規定されることになり, (4), (5) で見てきた接続詞の発達を説明する (定形節が表す) 叙述 (事態), 命題, 発話行為の区別を的確に行うものではない。

- (32) 名詞句 (e. g., a/the/this/that dog) = epistemically grounded entity (thing)  
 定形節が表す叙述または命題 = epistemically grounded entity (relation)  
 発話行為 = epistemically grounded entity (relation)

## 5. 本稿の主張

すでに見てきたように, 語の意味変化の説明には relation を表す語によって関係付けられる実体の変化というものが重要であることに着目し, 本稿では,

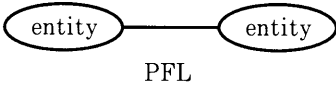
- (33) 語においてプロファイルされる実体 (entity) の変化が語の意味変化の重要な要因である  
 ことを主張する。

このことを主張するためには, まず, relation を表す語によって関係付けられる実体とはどのようなものであるかを考察する必要がある。ところで, 代名詞化される概念は人間の認識において実体として捉えられる概念的単位であると考えられるが, その実態を見てみると, (34) に示したように, 具体物だけでなく, 抽象的特性, 事態, 命題, 発話行為に至るまで, 代名詞化が可能である。

- (34) a. A: Allegedly, there is a region of the Netherland that is quite hilly.  
 B: Yes, *it* is called Limburg. [concrete thing]  
 b. He is a gentleman, *which* his brother is not. [abstract thing (property)]  
 c. A: I've finally managed to sell my car.  
 B: *That's* good. [relation (state of affairs)]  
 d. A: Your friend is an extremely good liar.  
 B: Yes, *that's* true, I am afraid. [epistemically grounded relation (proposition)]  
 e. A: Can I see you for a moment?  
 B: Is *that* a request or an order? [epistemically grounded relation (speech act)]

(23) の図式が示すように, relation を表す語によってつながれる実体は thing であっても別の relation であってもよく, つながれる実体は (35) に示すように具体物, 抽象物, relation

と様々である。

(23) RELATION:  entity = thing or relation  
PFL

(35) RELATION: concrete thing — concrete thing = concrete relation  
abstract thing — abstract thing = abstract relation  
relation — relation = abstract relation  
                  :                  :                  :

つながれる実体の種類の変化が, relation を表す語の意味の拡大を実証する例は数多くあるが, その一例として beside(s) を見ることにしよう。

(36) beside(s):

<By the side of, by one's side>

a. c1200 *Tnn. Coll. Hom.* 31 *Da come on angel of heuene to hem, and stod bisides hem.*

(*Mod: Her house is beside the river.*) [concrete thing (physical object); propositional]

<In addition (to), over and above>

b. 1557 *N. T. (Geneva) Luke xvi. 26 Besydes* all this, betwene you and us there is a great gulfe set.

(*Mod: Besides being a clergyman, he is a famous musician.*) [abstract thing (property); propositional]

c. 1611 *Bible Gen. xix. 12* And the men said vnto Lot, Hast thou here any *besides* ?

d. 1586 *Cogan Haven Health (1636)97 Besides* that this water cooleth all the inward parts, it doth greatly heple the stone.

(*Mod: She is clever and (she is) pretty besides.*) [epistemically grounded relation (proposition); textual]

<Introducing a further consideration: As an addtional or further matter, moreover, further>

e. 1774 *Burke Amer. Tax Wks. ll. 384 Besides*, they were indemnified for it.

(*Mod: It is rather too late to go out; besides, I am tired.*) [epistemically grounded relation (speech act); expressive]

上の (36) に示した OED からの用例に見るように, beside(s) によってつながれる実体が具体物から発話行為に至るまでの変化の過程を通して用法が拡大し, 今日の beside, besides の用法が出現している。ここで注意すべきは, beside(s) の意味発達は, 年代的には具体物をつなぐ前置詞的用法が最も早く, 次に抽象物(特性)をつなぐ前置詞的用法, さらに叙述(事態)や命題をつなぐ接続詞的用法, さらにその後に発話行為をつなぐ接続副詞としての用法を発達させている点で, Traugott が指摘する命題的(propositional)意味から談話構成的(textual)意味,

さらには態度表明的 (expressive) 意味を発達させる一方向的発達の典型的な例である。

## 6. まとめ

以上に述べたことをまとめ、Traugott の指摘する意味変化の傾向との関係を述べると、次のようになる。

(37) a) thing と relation の区別を基本とする分析の場合

relation を表す語のプロファイルされる実体 (entity) が、

- 1) concrete thing → abstract thing : 傾向 I
- 2) thing → (epistemically grounded) relation : 傾向 II, 傾向 III

b) 発話の意味構造分析を採る場合

relation を表す語のプロファイルされる実体 (entity) が、

- 1) 具体物 → 抽象物 : 傾向 I
- 2) 物 → 叙述, 命題, 発話行為 : 傾向 II
- 3) 叙述 → 命題 (態度), 発話行為 : 傾向 III

(37 a) に示したように、thing と relation の区別を基本とする分析の場合、relation によって結びつけられる実体が 1) 具体物から抽象物へ変化することが傾向 I を生み出し、2) thing (物) から relation ないしは epistemically grounded relation へ変化することが傾向 II, 傾向 III を生み出すと言える。一方、(37 b) に示したように、発話の意味構造分析を取る場合は、relation によって結ばれる実体が具体物から抽象物へ変化することが傾向 I を、thing (物) から叙述 (事態), 命題, 発話行為へ変化することが傾向 II を、さらに叙述 (事態) から命題 (態度) や発話行為への変化が傾向 III を生み出す、ということになる。

また、Traugott の指摘する propositional > textual > expressive という変化の方向は、(6) に示した発話の場での文の伝達内容に立ち戻って考えると、narrated event を表す表現から speech event に関わる表現 (Langacker の用語を用いると、ground 表現) への変化と言い換えることができる。

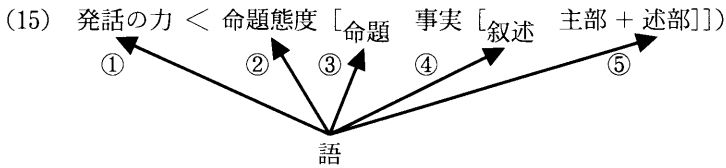
(38) propositional > textual > expressive = narrated event 表現から speech event 表現への変化  
さらに、(6) の発話の場の文脈で考えると、(39) に述べるように、textual 表現を生む傾向 II は談話構造からの要請によって生まれ、expressive 表現を生む傾向 III は対人的表現の必要性から生じると考えられる。

(39) 傾向 II (textual 表現の発達) : 談話構造からの要請

傾向 III (expressive 表現の発達) : 対人的表現の必要性

最後に (16) から (19) に掲げた例などを考え合わせると、narrated event 表現から speech event 表現への発達の過程は、詳細にみると、(15) の発話の意味構造の⑤の階層に関わる表現から②ないしは①の階層に関わる表現に至る発達の過程と見なすことができ、もしこの分析が正

しいとすると、(さらなる調査が必要ではあるが) 意味変化の方向性は、(40) に示したように、語が文の意味構造の内部の階層から外側の階層へとその意味を変化させることであると見なすことができる。



(40) ⑤ → ④ → ③ → ② or ①

## REFERENCES

- Allan, K. (1986) *Linguistic Meaning*. London and New York: Routledge & Kegan Paul.
- Back, K. and R. M. Harnish (1979) *Linguistic Communication and Speech Acts*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.
- Bybee, J. and W. Pagliuca (1985) "Cross-linguistic Comparison and the Development of Grammatical Meaning," in J. Fisiak, ed., *Historical Semantics and Historical Wordformation*. Berlin: Mouton.
- Bybee, J., R. Perkins and W. Pagliuca (1994) *The Evolution of Grammar*. Chicago and London: The University of Chicago Press.
- Close, R. A. (1980) "Will in If-Clauses," in S. Greenbaum et al., eds., (1980) *Studies in English Linguistics for Randolph Quirk*. London: Longman.
- Declerck, R. (1991) *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Fraser, B. (1983) "The Domain of Pragmatics," in J. Richards & W. Schmidt, eds., (1983) *Language and Communication*. London & New York: Longman.
- Kiparsky, P. and C. Kiparsky (1971) "Fact," in D. D. Steinberg & L.A. Jakobovits, eds., (1971) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 久野 暉 (1973) 『日本文法研究』 東京: 大修館書店.
- Langacker, R. W. (1985) "Observations and Speculations on Subjectivity," in J. Haiman, ed., (1985) *Iconicity in Syntax*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- \_\_\_\_\_ (1987) *Foundations of Cognitive Grammar* vol. 1: *Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- \_\_\_\_\_ (1990) "Subjectification," *Cognitive Linguistics* 1, pp. 5-38.
- Lyons, J. (1977) *Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 中野弘三 (1991) 「節の意味構造」中野弘三ほか(編)『言葉の構造と歴史——荒木一雄博士古希記念論文集』東京: 英潮社.
- \_\_\_\_\_ (1993) 『英語法助動詞の意味論』 東京: 英潮社.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London & New York: Longman.
- Searle, J. (1979) *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. (1990) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.

- Traugott, E. C. (1982) "From Propositional to Textual and Expressive Meanings: Some Semantic-Pragmatic Aspects of Grammaticalization," in W. P. Lehmann and Y. Malkiel, eds., (1982) *Perspectives on Historical Linguistics*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- \_\_\_\_\_ (1986) "From Polysemy to Internal Semantic Reconstruction," *BLS* 12, pp. 538-550.
- \_\_\_\_\_ (1988) "Pragmatic Strengthening and Grammaticalization," *BLS* 14, pp. 406-16.
- \_\_\_\_\_ (1989) "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change," *Language* 65, pp. 31-55.
- Traugott, E. C. and E. König (1991) "The Semantics and Pragmatics of Grammaticalization Revisited," in E. C. Traugott and B. Heine, eds., (1991) *Approaches to Grammaticalization* vol. 1. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Vanderveken, D. (1990) *Meaning and Speech Acts*. Cambridge: Cambridge University Press.